

# 紋亭の

# 傷痕



CRIMSON COMICS



功績を上げてマルスに  
認められようと

単独で敵陣に  
向かっていった  
シーダ

気付くとシーダは  
ならずものたちに  
囲まれていた

殺しなさい！

ドルーアの捕虜に  
なるくらいなら  
死んだ方がマシよ！





殺すわけが  
ないだろうか？

殺したら何も  
たのしめねえじゃ  
ねえかッ！



今までに性行為を一切  
体験したことの無いシーダは  
股間を触られるだけで敏感に反応した

やっ！

ハッ

わざわざこんな  
ところまで  
来てくれたんだ

オレ達と  
楽しもうぜえ…

そんな…

こんなことに  
なってしまうなんて…





お、おめ……！

ああっ！



わざわざこんなところまで来たんだ

オレ達とたのしもうぜえ

すっ





何の抵抗もできぬまま  
仰向けに押さえつけられた  
シーダ

男達の手から逃れようと  
体をくねらせるが

そのような仕種は  
ならずもの達の嗜虐欲を  
さらに増幅させる結果となった



おめい

さつさと  
御開帳と  
いこうぜえ



へへへ...  
可愛い声だ

たまんねえぜ

いやあッ!

グイ





んぐっ!

くちゅ

くちゅ

もみ

もみ

ピョッ

うっ...

たすけて  
マルス様!



シーダにもはや  
抵抗する気力もなく

か弱い哀願を  
つづけるしかなかった…

はあ  
はあ

さてと…

カチャ  
カチャ

そろそろ  
いただこうぜえ





あっ!

えっ?



やめてっ!

失いかけていた  
抵抗の気力を取り戻し  
振りほどこうとするが  
逃れることはできなかつた



天馬騎士ってのは  
いい女ばかり  
だからな

一度 いれて  
みたかったんだ

あああ!!

マルス様……!

カッ



激痛に悶え苦しむ  
シーダの絶叫が闇夜に  
響きわたる

シーダを全身を反らせ  
息も絶え絶えに  
叫び続ける



どうだあ？

雌になった  
感想はよお？

んっ！



んっ！



なッ…  
許してえッ！

よおし…

そろそろ  
いくぜえッ！

な…中は…  
中は許してえええッ！



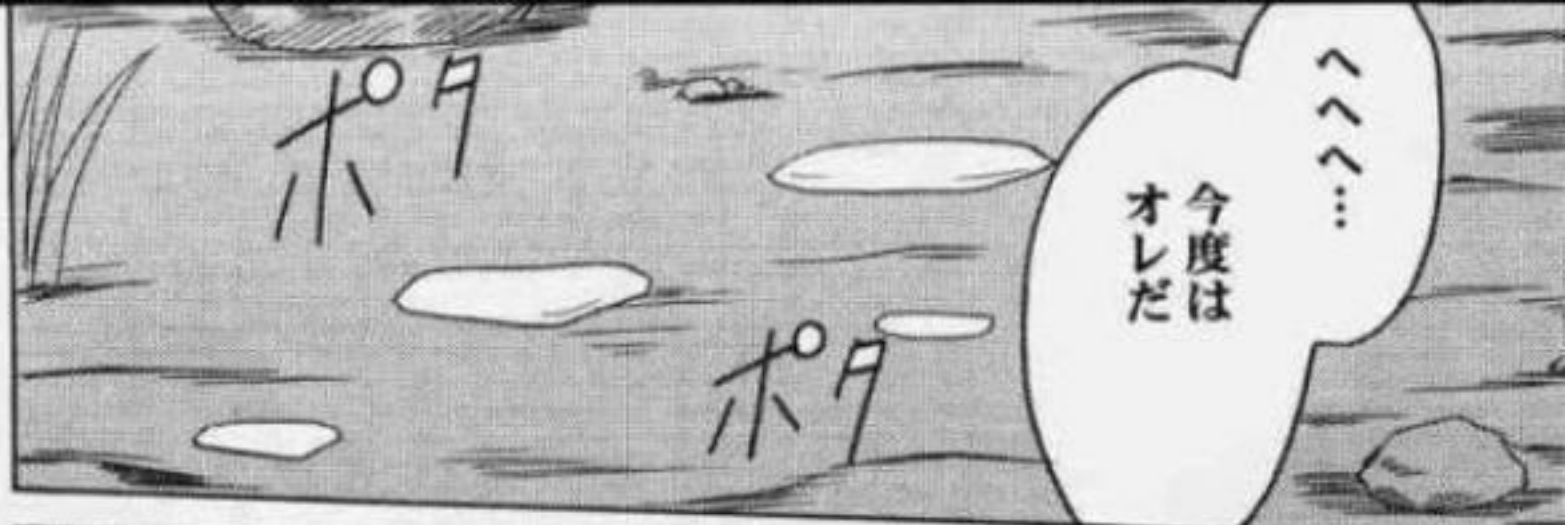
天馬騎士のプライド  
処女、そして未来…

今まで守ってきた  
自分のすべてを  
ならず者達に  
蹂躪されてしまった

あああつ！

いやあああツ！





今度は  
オレだ

へへへ...



ああ  
あッ!





はああッ!

ひっ!!


ゴクッ

その後もならずもの達に  
犯され

全身の至る所を  
男達の手と肉棒と  
白濁 によって  
汚されていった

グチュ

グチュ



シーダは容赦なく続く  
陵辱に慣らされてしまったのか

まるで糸の切れた操り人形のように  
弄ばれ続けた…



# 小説版

## 堕ちた天馬騎士

作/N. O

このマンガのもとになった小説も掲載してみました。

マンガではページの都合上 カットしているシーンがいっぱいあるのがわかりますね。(笑)

マンガってそういうものです。

ちなみに…

この小説であるように 私もはじめてFEをやったとき

シーダー人をノルダの奴隷市場にとぼしてならずものに囲まれてやられてしまいました。(笑)

結構いるのだろうか…そういう人。

オルレアン城の奪還に成功し、アカネイア女王ニーナよりファイアーエムブレムを託された

アリティアの王子マルスは、次なる目的地、聖都パレスに向けて進軍を開始した。聖都パレスはアカネイア王国の首都にして大陸の象徴でもある。ここを解放できればこれまでの圧倒的ドルーア有利の戦局は大きく変わる。むしろドルーアも手をこまねいて聖都をあけ渡すはずがない。聖都パレスはかつてない激戦地になるだろうと誰もが予想していた。途中、ディール要塞にてマケドニア王女マリアを救出、マリアの姉ミネルバ王女もマリア共々解放軍に加わり、今ではマルス率いる解放軍は、タリス出兵当時の数倍の戦力になっていた。また、マルスに対する人民の期待も日に日に増してきており、同盟軍の勢いはドルーア軍を圧倒していた。しかし、頼もしい仲間達が集ってくることに複雑な心境でいる者もいた…天馬騎士のシーダは明らかに引け目を感じていた。

タリスの王女シーダは『タリス一の天馬使い』といわれた名手である、腕には自信があった。

これまでもマルスのもとで数々の戦果をあげてきた、しかしそれは相手が力まかせの山賊までのことである。相手がドルーア軍主力になると、力のない天馬騎士では致命的なダメージを与えられず苦戦が続いてきた。そこに『紅い竜騎士』ミネルバが仲間に加わると、シーダは次第に前線から後方支援にまわされていった。後方支援も重要な軍務であるということはシーダ自身も自覚していた、しかしシーダは最前線で戦いたかった。マルスのそばで役に立ちたい、という思いからである。

「ミネルバ王女には及ばないけど…私だってまだ戦える」

だが、今活躍しないともう前線にはでられない。その焦りがついに、シーダに独断行動をさせてしまった。

昨夜の作戦会議でパレス周辺にシューター部隊が配置されていることを知ったのである。

北側の山脈を回りこんで進軍する解放軍にとって、山の向こうから攻撃してくるシューターは脅威になろう。

「このシューターを全て撃退すれば…」

天馬使いであるシーダなら山を越えてシューターに攻撃が可能である。

「私なら撃退できる…このシューターを撃退すればきっとマルス様も私にも前線戦わせてくださる…！」

決心がつくまで少しも時間はかからなかった。会議が終わるとシーダは足早に彼女の天馬のもとに向かっていた。たった一人で敵陣に向かうことを、マルス様は許すはずがない。それゆえ、シーダは誰にも気づかれぬよう細心の注意をはらい、敵の手にある聖都パレスにむけて飛び立っていった。

「私だって…」

今のシーダには目の前にいるであろうシューター部隊の撃退のことしか頭になかった。

そんな彼女に、シューター部隊の周辺に存在する伏兵のことなど知りようがなかった…

功績を上げてマルスに認められようと、無謀にもシーダは単独で敵陣に向かっていた。

「たしか…この先に……いたッ！！」

シーダは森の中の敵シューターを発見すると、天馬を一直線に突っ込ませていった。

「はあああッ！」 「ッ!？」

突然の敵襲にシューターは悲鳴をあげることなく戦死した。

シーダは素早く天馬から降りると、シューターの動力源を破壊する。

「よし、まずは一つ目…次は…」

戦場での緊張と奇襲の成功に胸の鼓動が早まっているのを感じながら、次の目的地に向かうため天馬に乗ろうと



したその時、

「やってくれたじゃねえか…女ナイトさんよお！」

「…ッ!？」

声のする方を向くと、林の影から粗雑な姿をした男達がニタニタとしながらシーダを眺めていたのだ。

そして、今になってシーダはようやく、自分の周りを10人ぐらいの男達が囲んでいるのに気がついた。

「い…いつの間に……!？」

(て…敵兵の存在に気づかなかったなんて…!)

空からの攻撃を常とする天馬騎士は地上の者よりも周りの状況が把握できる。

しかし森の中、しかも夜間であったために周囲の視界は最悪であった。

そして、それよりもシューターにだけ目がいていたため、周辺の注意がおろそかだったシーダの不注意が最もな理由であった。

「クッ!!」

自分の迂闊さに、いまさら愕然としながらも、シーダはあわてて天馬に跨って飛びだとうとする。

「フンッ 逃がすかよおッ!!」

「きゃああッ!!?」                      ドサッ!

飛び立とうとするところを、男が手筈を投げつけ、天馬の翼を切り落としたのである。

苦しむ天馬に、もう一人の男が強烈なとどめの一撃がくわえられ、シーダの天馬は絶命した。

「これでもう飛んで逃げれねえぜ…どうするんだあ女ナイトさん？」

「なんて酷い事を…よくも…ッ!!」

落馬の際地面に転げ落ちたシーダは、よろめきながらも剣を抜き、愛馬を殺した男に怒りのままに斬りかかった。

「ケッ…天馬のいない天馬騎士なんざ赤子同然だぜッ!」                      カアアアアッ…

「あッ…グッ!？」

男のたった一振りには、シーダは剣ごとふっとばされてしまった。

男がシーダの剣を拾い上げると、周りにいた男達がシーダを押さえ込み、剣を剥がし取っていく。

「クッ…こ…殺しなさいッ! ドルーアの捕虜になるくらいなら死んだほうがマシよッ!」

「フン! 殺すワケがないだろう…殺したら何も楽しめねえじゃねえかッ!」

突然男の手がシーダの胸を鷲掴みにする。気丈な顔が屈辱に歪む。

「きゃあッ!…うッ…ぐうッ!…その手を離しなさいッ!」

「へへへッ…なかなか触り心地がいいぜえ、騎士にしておくなんざもったいいえぜ!」

男は逃げられる様子もなくシーダの胸をこね回し続ける。赤い服ごと掴まれた胸が柔軟に形を変える。

「うあああッ…やめろッ…やめろおッ!」

「女ッ気のねえ前線暮らしが続いてたからなあ!ずいぶん溜まってたんだぜえ!」

もう一人の男がシーダのスカートの中に手をいれ下着越しに股間を探る。

(…ヒッッ!?)

今までに性行為を一切体験したことのないシーダは股間を触られるだけで敏感に反応した。

脚を閉じたかったが両足は別の男が押さえつけていて動かない。

（うッ…ううッ…いやあああ…）

「お前をたっぷり犯しぬいたあと、メルダの奴隷市に売り出すってのも悪くねえなあ」

男は股間をさんざん弄んだ後、シーダに絶望の言葉をかける。

「ああっ…あああああ……」

かつてない恐怖にシーダは体をガクガクと震えさせ、男から顔を背けて体を震わせている。

（そんな…こんなことになってしまうなんて…）

マルスに認められたいがために単独で出撃したものの、今ではこうして無様にならずもの運に捕まり凌辱されようとしている。男連からは笑みの表情が伺える。悪夢の始まりであった…

何の抵抗できぬまま仰向けに押さえ込まれた天馬騎士のシーダ。

「ううう…やめてええ…ええ…お願い…やめてえッ！」

シーダは震えた声でならずものに屈辱の哀願をする。

「なあに…わざわざこんな所まで来てくれたんだ…オレ達と楽しもうぜえ…」

ならずもの連は、いやらしく雑踏みをするような目つきで自分達の獲物を見つめながら服越しでシーダの体をいじりまわしている。

「う…うあああああ…いッ…いやああ…いやあああああああ…」

男連に翻られるという未知の恐怖に性体験のないシーダは、男連から顔を背き、カチカチと歯を鳴らし

今にも泣き出しそうな眼をしながら、男連の手から逃れようと体をくねらせていた。

そのようなしぐさは、ならずもの連の嗜虐欲をさらに増幅させる結果となった。

男はシーダのアゴを乱暴に掴み、男の方に向かせシーダの表情を楽しんだ。

「あッ…あうッ…!？」

「へっへっへ…いい表情だぜえ…女ナイトさんよお！」

そう言い終わると男の厚い唇がシーダの唇を塞ぎ舌をねじ込んで口内を犯し始めた。

「んぐッ…ッ!？」

流し込まれる男の唾液を吐き出す術はなくシーダは咽ながらそれを飲んだ。

「あぐらッ…ゲホッ…ゲホッ…う…うう…」

シーダは口端から涎を流しながら、頭を垂れて力無く嘔り泣いていた。

「さてと…さっさとご開帳といこうぜえ！」

短剣を持った男がシーダを馬乗りにして、短剣の先でシーダの胸を弄びシーダに更なる恐怖心を煽らせた。

「いやッ! やめてえ! やめてええエッ!!」

男は必死になって泣き叫ぶ様を楽しみながら、ゆっくりとシーダの服を短剣で切り裂いていく。

いささか膨らみはないが形のよい白い胸と、まったく未開の秘所が露出する。

「あ…い…いやあああ…!!」

ならずもの連の前に恥ずかしい部分をさらけ出され、シーダは絶望の呻きを上げた。

「なにノロノロやってるんだよおッ! さっさと全部剥いじまえよおッ!」 ビリッビリビリビリッ!!

「ひああああッ!!」





じわじわと切り裂いている男のやりように見ている我慢できなくなった男が、両手でシーダの服を掴むと一気に引き裂いた。

「やめてええ…見ないで…見ないで……」

赤い上着とスカートが剥ぎ取られ、びっちりした長いタイツと、手袋だけの屈辱的な格好にされても、怒りは恐怖の前に屈服しており、シーダは肩を震わせて涙を流して哀願をするしかなかった。

「へっ…可愛い声だ！ たまんねえぜ！」

男はその双乳をわし掴み、乱暴に揉みしだし始める。

「ひっ！…ひああああッ！…あッ…あああああッ！…ああああ…」

青い髪を振り乱しイヤイヤをする顔の両頬から涙が飛び散る。

「下の方はどうかなあ？」

別の男がシーダの股下に潜り込み、未発達のお尻に吸い付いている。

男はその長い舌で中を割り、食べるようにお尻を舐め回す。

「いやあああッ！ んはあッ！ ああああッ！」

次々と流れ込む、いままでに味わった事のない感覚に、シーダは体をよじらせ悶え苦しむ。

「こいつを啜えもらおうかッ！！」

更に別の男が強欲の塊をシーダの口先にあてがい、強引にねじ込もうとした。シーダは口をとじ拒んだが、そんな可愛い抵抗はあっさり破られてしまう。シーダの口は、男の剛直をされるがままに受け入れるしかなかった。

「おらあッ！ 舌使って奉仕しろよおッ！」

「んんんッ！！ んぐうッ！ むう！ んああんッ！」

シーダの口には大きすぎる男の剛物が喉の奥にまで挿入される。シーダの口端からは涙が垂れ流しになっている。

「…いいぜえ…そろそろ出すぜえ…」

そう言って男はおびただしい量の精液をシーダの口内に注ぎ込んだ。

「んんああッッ…！！」

男の剛物が喉の奥にまで入れられているため、吐き出すこともできずに、全て飲み込まざるを得なかった。

「…んあああああ……や…やめてえ……もう…許してええ…」

精液まみれになったシーダの口から男のものが抜き出されると、シーダはもはや抵抗する気力もないのか、顔を背けることなく、やむことのない男達の凌辱に涙を流し、か弱い哀願を続けるだけだった。

「さてと…そろそろ頂こうぜえ」

そんなシーダを見ながら、男は無慈悲な宣言をする。

「天馬騎士ってえのは、いい女ばかりだからなあ…一度入れてみたかったんだあ！」

うつろな感覚ながら、その言葉の意味をようやく理解したシーダは、処女喪失の恐怖に体を震え始める。

「いやあああああッ！ お願ひ…お願ひですから…それだけは許してえええッ……！！」

天馬騎士のプライドも忘れて、シーダはならずもの連に涙と流しありったけの声を出して哀願する。むろん、男達はシーダの言う事など無視し、暴れるシーダの体を押さえつける。マルスに捧げるはずであった捧は、今まさに最悪の状況で失われようとしている。



失いかけていた抵抗の気力を取り戻し、男の押さえを振り解こうとするが、逃れることは出来ない。

「やめてッ…やめてええええッ！！」

男は両手でシーダの太ももをつかむと、彼女の足を無理やり左右に開かせた。

シーダ自身でさえ触れることのなかった処女の秘所全開になる。

「やっぱり初物かあ…てえことは…俺が初めての男になるってえわけだなあ？」

女騎士の絶望と恐怖の表情を楽しみながら、男は剛物をシーダの秘所に当てた。

「へへッ…それじゃあ入れるぜえ？」

「う…うあああああッ！ いやあ！いやあああああああッ！！」

ブツッ…ブチイイイイ…！！ シーダの悲痛の叫びもむなしく、ならずもの強引な挿入が始まった。

「いやあああああッ！！…マ…マルス様あ…ひあああああああああッ…！」

肉と肉が擦れその動きを妨げる。

処女だったシーダの秘所は、男のものの大きさにギチ…ギチッと悲鳴をあげている。

「へっへっへ…さすが処女だあ…いい締め付けだぜえッ！」

「いやあああッ！！やめてええ！ ひいいいっ！！ 抜いてえええッ！！」

激痛に悶え苦しむシーダの絶叫が闇夜の森に響きわたる。シーダは全身を反らせ息も絶え絶えに叫び続ける。

「こちとらあ前線暮らしで、女とやるのはひさしぶりなんだ、まだまだ楽しませてもらうぜ！」

男の剛直はシーダの中でさらに激しさを増した。そして喜びにまかせそれを一気に根元まで突き上げた。

「あああああッ！ いやあああああああああああああッ！！」

グシュッ！グシュッ！グチュッ！グチュッ！ズブッ！

男はシーダをいたぶるかのようにゆっくりと腰を動かした。

「どうだあ…雌になった感想はよお？」

処女喪失の痛みとショックで、うつろな目をしているシーダは男連の声に反応していない。

突き入れられる度に、シーダの首は力無く揺れ青色の髪を振り乱す。

「はあああッ…はあああッ…んはあああッ！」

だらしなく開いた口からは涙が垂れ滴されていた。

もつとも、男はそんなことを気にもせずシーダの秘所を突き続ける。

「いいぜえ…女ナイトさんよお…そろそろいくぜえッ！」

「なッ…許してええッ！！ な…中は…中は許してえッ！ お願いだからあッッ！」

男のピッチが早まっていく、泣き叫ぶシーダの哀願はあまりに無力であった。

「…お願いい…やめてええ…やめてええッ…許してえええッ！…」

「へっへっへ…たあっぷりと注いでやるよおッ！」

男はそう言うと、ありったけの男の欲望をシーダの中に注ぎ込んでいった。

「う…うあああああッ！ いやあ！いやあああああああああッ！！」

ドクッ…ドクッ…ドクッ…ドクッ…

「ひッ…ひあああああ…あッ…あああああ…あああああ………」

天馬騎士のプライド、処女、そして未来、今まで守ってきた自分の全てを、ならずもの連に蹂躪されてしまった。

自分のなかに凌辱者の精を注ぎ込まれながら、シーダは絶望と無力感の表情を浮かべ、体をヒクつかせていた。

「ふうっ……なかなかよかったぜえ…」

シーダのなかをしばし楽しんだ後、シーダの秘所から剛直が引き抜かれる。

「はああッ…はああッ…はああッ…」

とりあえず挿入は終わった…これでもう…。放心状態でありながら、シーダの顔にわずかながら安堵が見える。

しかし、ならずもの達がこれで終わりにさせるはずがない。

「へへッ…今度オレだあ！」

凌辱されたばかりのシーダに、もう別の男が挿入しはじめようとしている。

「ひッ…いッ…いやああッ！お願いッ…もう許してッ…あひひひひひひひッ！」

「うるせえよ…おらあッ！」　ズブウウ…ッ！

入れられたばかりのシーダの秘所は、すんなりと男のものを受け入れていく。

一気に奥にまで入れると、男はシーダを起し、自分の体にのせ、騎乗体の体位でシーダを突き上げ始めた。

「はあんッ！…あッ…はああッ！…いやああああッ！」

男のものが自分の中に差し込まれ、シーダは再び凌辱に悶えはじめる。

「…オレ達も楽しませてもらおうぜ…へっへっへ…」

まわりで凌辱の様子を見ていた、ならずもの達がゆっくりと群がってくる。

男は真っ先にシーダの頭を押さえ、そのだらしなく開いていた口に肉棒を挿入し口中を舐めはじめる。

また別の男は、シーダの脱力しきった手を持って自分のものを握らせる。

「うふううあああんッ…あ…んあああああああ…！」

全身を握られる不快感に耐えられず、再び泣き叫び始める。

しかし、肉棒がシーダの喉奥にまで挿入されているため、くぐもった声しか出ない。

「んはああッ…んはああッ…ああああッ…んはああッ！！」

「持ってろお…今、思う存分叫ばせてやるぜえ…」

口を舐めていた男が、シーダの口から自分のものを抜き出すと、涙と涎で濡れたシーダの顔に目掛けて白濁液をぶちまけた。それとともに、両手に持たされていた肉棒も精を浴びせ掛けた。

「あ…はあ…ああああッ…あああああ…」

「へへへ…次はどうしてやろうかなあ…」

「お…お願い…許して…もう…もう許して…」

涙と精液で顔をクシャクシャにさせ、泣き喚いて哀願するシーダの表情は、ならずもの達をより興奮させる要素でしかなかった。

「そうだな…じゃあ、もうイカせてやろうかなあ！」

シーダを下から突いている男が悪魔のような笑みでシーダに応じると、突き上げるピッチを早め始めた。

体が宙に浮くほどの激しい突き上げに、シーダは呼吸もままならないで悶え苦しむ。

「いッ…ああッ…も、もう…だめえ…あッ…だめえええッ！…あああああッ！…」

息も絶え絶えに泣き喚くシーダは、ならずもの達の囂りに初めての頂上に上がっていく。

「おやあ？イくのかい？ 淫乱な女ナイトもいるもんだなあ！！」





そう都合しながら、男はあっそう激しくシーダの奥底を突きまくる。

「あひッ…んあ……あッ…いくッ…いくうッ！……んああああッ！」

頭の中が光とともに真っ白になる。全身の力が抜ける……。目が虚ろになり喉をのけ反らせ、遂にシーダ絶頂に達した。溜まった涙を振り払い、白く汚された青い髪を乱らせ、体を弓なりにびーんと反り返している。

「あッ！…ああああああああああああああああ……！！」

処女を散らされ、初めての絶頂を迎えさせられた。これ以上ない屈辱感を味わいながら絶頂の悲鳴を上げ続ける。

「見事なイキようだなあ！初めての絶頂だったのかあ？」

「あッ…はああッ……んはああッ…んあああ……」

シーダは荒い呼吸をしながら、絶頂のショックに、頭を垂れて体をヒクつかせている。

「へっへっへ…実に良かったぜ…こいつあ、高く売れるぜえ！」

ドクッドクッドク…… そう言いながら男はシーダの中に白濁液を注ぎ込んでいた。

「ああ…あああ…あ…あああ…」

シーダはもはや哀願する気力すらなくなったのか、ただボンヤリと男が注ぎ終わるのを、呻き声を洩らしながら待っていた。シーダを絶頂に飛ばした男は、シーダの中に精を注ぎ込み終わると、シーダの太股を下から持ち上げ、肉棒を引き抜き、そのままゆっくりと立ち上がり、ぐったりしたシーダの両足をM字型に開脚させ、凌辱の跡を周りの男達に見せつけ始めた。

「ほおら…お前の中をみんなに見てもらいなあッ！」

凌辱されたばかりの秘所はポッカーリと開いたままで、白濁液がゴボゴボと漏れて地面に滴っている。

赤いブーツを履いた足先は、絶頂の金眼で小刻みにヒクついている。

「くうへへッ…気分はどうだい？天馬騎士殿よお！」

全員が不敵な笑みを浮かべ、自分達の獲物をじっくりと鑑賞する。

「うッ……ううう……もう……終わって……もう…やめてえ……」

男に無様な格好で持ち上げられ、全開された自分の秘所を下品な笑みを浮かべ見られている。

あまりの羞恥に、だが身も心も屈辱してしまったのか、シーダは顔を背くこともなくただ咽び泣いていた。

男達がそんなシーダの様子を見て下卑た笑いを漏らす。

「まだ、たった一回しかイッてねえんだ。もっといかせてやるよお…もっとなあッ！」

「イカされることの悦びってやつをたっぷりとその身に植え込んでやるよお！」

そして凌辱が再開される……。

「ああああッ…んはあッ…はッ…」

その後もならずもの達に犯され、シーダは顔といわず乳房といわず男達の精液でグチュグチュにされた。口も、下の二つの穴も、胸も、全身の至る所を男達の手と肉棒と白濁液によって汚されていった。シーダは、容赦なく続く凌辱に慣らされてしまったのか、まるで糸の切れた操り人形のように、ぐったりとなった体を好きなように弄ばれ続けていた。いつまで続くのだろう…いつまで私は弄ばれるのだろう…いつまで……マルス様……

眼から理性の色が完全に消えたシーダには、もはや何も見えていない。ボンヤリとした頭の中に、自分の事、マルスの事、共に戦った仲間達の事、様々な想いが巡ってくる。だが、ならずもの達に凌辱され続け、あられもなく上がり狂いながら、次々と注ぎ込まれる快感によって、やがて、それはかき消されていった。





クリムゾン コミックス

A13-1

**勇**み足で単独行動をとってしまった  
シーダはならずもの達にとりかこ  
まれてしまい抵抗もむなしくおわりな  
き陵辱をうけてしまう。

FOR ADULT ONLY